

Title	98年度岩本ゼミ年間活動報告
Author(s)	藤嶋, 正信
Citation	岩本ゼミナール機関誌 (1999), 3: 89-91
Issue Date	1999-03-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/56857
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

98 年度岩本ゼミ年間活動報告

文責 藤嶋正信

本年度のゼミは、三回にもわたるインゼミ、積極的、自主的なサブゼミ、など正規の活動だけでなく、プライベートにおいてもゼミ生同士の横のつながりが生まれてきました。さらに本年度で特筆すべきは、9月にOB会である第一回青竹会が開かれたことです。すでに社会人として働いていらっしゃる諸先輩方を見て、まだ若いゼミとはいえ伝統を感じました。

以下、本年度の活動を簡単に記していきます。

4月2～4日 春合宿

先生曰く、「遊びと勉強を半々」が目的の春合宿は石川県金沢市、兼六園のそばにある兼六荘で行った。「勉強」の方は、以下の文献を読む予定だったが、時間の都合で『フルセット型産業構造を超えて』はできなかった。勉強会では、自分の分担のところ以外読んできていない者も多数おり、盛り上がらないまま終わった。

一方で、満開の桜が咲く金沢のこの季節、天候にも恵まれ、居酒屋「一力」ではおいしい料理を食べさせていただき、「遊び」については十分目的が達成されたと思われる。何よりも、1年間のゼミ活動の最初のイベントで、2回生から4回生までが親睦を深めることができたといった点で、有意義なゼミ合宿であった。夜の先生はいつものとおりだったが、岩本ゼミデビューのルーキーたちには衝撃的だったかもしれない。

{合宿用文献：丸山真男『日本の思想』岩波新書、安達智彦『株価の読み方』ちくま新書、坂本義和『相対化の時代』岩波新書、伊藤光晴、根井雅弘『シュンペーター—孤高の経済学者—』岩波新書、菊地悠二『ビッグバン成功の条件』中公新書、関満博『フルセット型産業構造を超えて』中公新書、伊藤光晴『ケインズ』岩波新書}

前期

前期は例年どおり、基礎的なテキストの輪読が行われた。当初若杉隆平の『国際経済学』を読む予定であったが、このテキストはミクロ経済学の学習していることが前提となって議論が展開されているためか、われわれには非常に難解だった。より読みやすいテキストに変更して以後は内容に少しは興味ももてたからよかったものの、ゼミの時間はあまり有意義なものではなかったように感じられた。日程と具体的な内容は以下のとおり。

テキスト 若杉隆平『国際経済学』岩波書店

4月14日 国際貿易の基礎

4月21日 [補論]マーシャル・ラーナーの安定条件

4月28日 比較優位と国際貿易

- 5月12日 生産要素の賦存量と国際貿易
- 5月19日 可變的生产技術と貿易均衡
- 5月26日 貿易政策の理論
- 6月2日 不完全競争下における貿易政策

テキスト 伊藤元重『ゼミナール国際経済入門』日本経済新聞社

- 6月9日 国際化の中の日本
- 6月16日 外国為替取引と為替レート
- 6月23日 休講
- 6月30日 国際収支と国際マクロ経済学
- 7月7日 国際資金フローと国際金融市場
- 7月14日 インゼミ用各種資料配布、前期ゼミ打ち上げコンパ

8月27～29日 夏合宿(於厚生年金神明苑)

夏合宿はメガネ愛好者にとっては絶好の(?)、メガネの町福井県鯖江市で行った。合宿ではインゼミを行うにあたって基礎的な知識の習得を図るべく、先生に示していただいた下記のようなテーマで3回生がプレゼンを行った。事前の準備、打ちあわせ等が不十分で、2回生の分担もなく、かなり薄い内容の合宿となった。この点、大いに反省せねばならない。夜の方は先生は毎度のごとお騒がせするわ、カラオケにいった連中は門限を破るわ(なんで行ってない俺が謝らなあかんのや!)、などと絶好調だったが、勉強が不十分だった分、物足りない合宿だった。

1、IMFのConditionalityとは何か。

- ・ファンダメンタルズが悪化した場合の緊縮政策はいかなる場合でも正当化されうるか

2、国際短期資本移動とはなにか

- ・タイのオフショア市場(BIBF)に巨額の資本流入
- ・国際金融に与えたメカニズム

3、通貨危機の理論

- ・クルーグマン、オブズフェルドの理論

青竹会

9月15日、芝蘭会館にて、岩本ゼミのOB会である第一回青竹会が開催された。岩本先生と高橋さんの講演を聞いた後、立食パーティーが行われた。岩本ゼミは今年で5年とまだ若い、なかにはすでに社会の一线で活躍されている先輩方いらっしゃる、われわれ学生にとって非常に貴重な機会であった。立食パーティーのあとは喫茶店で時間をつぶしたあと、居酒屋でコンパ。例のごとく一騒動あったが、大事には至らなかった。

後期

例年後期もテキストの輪読形式ですすめるが、今年度は、通常ゼミにおいてもインゼミ対策をすることとなった(詳細はインゼミ報告にて)。といってもメインはサブゼミ。下記のような日程で行われる高崎経済大学矢野ゼミ、関西学院大学鈴木克彦ゼミ、神戸大学藤田ゼミ、同志社大学藤原ゼミとのディベート、合同ゼミに向けて、各班週 2、3 回、本番直前には毎日のように研究室でサブゼミを行った。テーマは「アジア通貨危機」で、タイ、インドネシア、韓国をディベート、合同ゼミでそれぞれ取り上げた。関学、高崎経済大とのディベートを行うことは早くから決定していたが、神大・同大との合同ゼミは、日程の変更やら何やらがあって合同ゼミを行うことが正式に決まったのはなんと二週間前、少々ハードなスケジュールだった。

高崎経済大、関学相手に、ディベート本番では少々実力が出し切れない面があったものの、その過程では深いところまで勉強できたし、神大、同志社相手にも堂々とわたりあった。また、インゼミが終わってもサブゼミが続けられるなど、充実した学期となった。

11 月 13 日 ディベート 対高崎経済大矢野ゼミ

11 月 28 日 ディベート 対関学鈴木ゼミ

12 月 19 日 合同ゼミ 神戸大藤田ゼミ、同志社大藤原ゼミ

高崎経済大班 平井 東 桑原 柵山 野田 舩橋 松下 丸山

関学班 藤嶋 浅井 王 遠藤 関根 西丸 偷伽 吉川

合同ゼミ 久田 藤嶋 松下

総括

通常ゼミでは、一年を通じて分担する人の無断欠勤こそなかったものの、プレゼンに関して先生や TA の山本さんが軽くコメントするのみで、ただ淡々と消化していくという感じだった。単位を取るためだけに楽勝科目をとるのならともかく、せつかく小人数で勉強する場を与えられているのだから、ゼミ生がもっと積極的に発言し、能動的に学習していくことが望まれる。

一方、通常ゼミ以外では個性の強い 10 人の 2 回生が、新しい風を吹きこんでくれた。インゼミでは主力メンバーとして積極的な発言があり、関学とのディベートにおいては相手の 2 回生のオブザーバーを圧倒した。またサブゼミにも積極的な参加が見られたほか、インゼミをおこなううえで必要となってくるマクロ経済学を勉強したいと、柵山を中心とする 2 回生からの強い要望があり、清谷さんにチューターをしていただいて、勉強会も行われた。勉強会はインゼミが終わって年が明けても、内容はミクロ経済学に代わり、続いている。

次年度にはこの 10 人のほか、新たに 9 人の優秀な新入生が加わることになるが、後任のゼミ長として、その大任に丸山君に引きうけてもらうことになった。大変な一年となろうが、頑張ってもらいたい。

最後に、一年間、私たちを指導してくださった岩本先生、山本さん、柴田さん、インゼミ等でお世話になった清谷さんに感謝しつつ、締めくくりにする。